

## 9月16日は創立記念日

### 創立者の4人 日本の経済・政治に足跡 専修大学の教育に尽力

“世に魁(さきが)けし我等が大学”専修大学は、その前身である専修学校として明治13年(1880)に誕生。2009年には創立130年を迎える。日本で初めて経済、法律の専門教育課程を日本語で授ける専門学校として開学。主たる創立者は、米国に留学後、新時代を担う人材を育て、母国の発展に寄与しようとした相馬永胤、田尻稻次郎、目賀田種太郎、駒井重格の4人。

創立者たちは、社会で目覚ましい活躍を遂げる一方、専修学校の教壇に立ち、生徒の育成に尽力、専修学校の社会的地位を高めた。

4人の大いなる足跡をたどってみよう。(参考文献『専修大学百年史』)



▲大正9年の卒業証書。学長に相馬、講師に田尻、目賀田らの名前がある



▲さまざまな分野のベスト8が記された「八稱(はっしょう)人」(明治25年)。有名な私立学校に専修学校が...



▲創立30周年記念行動で「財政と金融」の講義をする田尻(大正3年ごろ)



## 創立者の4人 日本の経済・政治に足跡 専修大学の教育に尽力

### 相馬永胤—初代校長・学長に就任「横浜正銀」頭取務める

彦根藩の武勇の家に生まれた相馬永胤(そうまながたね)(1850~1924)は、動乱のなか初志を貫いた不屈の行動家である。のちに銀行家として不動の地位を築きながら専修大学の発展に最後まで力を尽くした。



明治3年(1870)新政府の命による彦根藩からの欧米視察員に選抜され、米国に旅立った。この時21歳。その後、思わぬ帰国から再渡米、失明寸前の眼病にかかるなど異国での数々の困難や危機を乗り越え、コロンビア法律学校(現・コロンビア大学)を卒業。さらにエール大学大学院で経済学を修めた。



この間、法学徒のクラブ「日本法律会社」を設立。これが専修学校誕生の土台となった。さらにさまざまな専門分野の留学生と共に幅広い学術分野のクラブ「興学社」を結成。留学中、終生の同志となる目賀田種太郎、田尻稻次郎、駒井重格らと出会い親交を深め、法律学徒と経済学徒の二つの輪が結ばれた。

帰国後、相馬は日本で最初の司法省附属代言人(弁護士)となるが、田尻、目賀田、駒井らと共に力をあわせ、専修学校創立に情熱を傾けた。米国留学時の仲間らの協力を得て、念願の専修学校を設立。法律学を生徒に教えた。「売買法」「海上法」「保険法」「流通証書法」「米国訴訟法」などを担当した。

14年(1881)、横浜始審裁判所判事などを務め、15年には、横浜正金銀行官選取締役となる。同銀行の立て直しと業務拡張が使命で、以後、相馬は終生同銀行の経営に身を捧げ、外国公債募集では異例の成果を上げた。

海外事情に通じ、ロンドン支店の開設に尽力するなど国内外において活躍。30年(1897)には同銀行の頭取の地位を得る。国際的金融活動を展開し、明治期の国家に貢献した。23年(1890)、第1回衆議院議員選挙に郷里の滋賀県から出馬し、当選を果たした。

この間も専修学校で教壇に立ち、高等商業学校(現・一橋大学)でも法律を講義した。

専修学校では校長制がとられた時から校長を務め、大正2年(1913)「私立専修大学」改称と同時に学長に就任。私学待望の大学令交布では、本校は11年(1922)に認可された。その年、文部省は学制頒布50年記念祝典に際し、相馬と田尻を教育功労者として表彰した。

多忙ななか、下戸塚(東京都新宿区西早稻田)に構えた自邸の庭園に学生や教職員を招き、園遊会を開くなど学生との交流を心がけた。

12年9月1日、大震災が関東を襲った。本学が明治、大正を通して拡充した施設設備は図書館の外壁1枚だけを残してすべて焼失。相馬は下戸塚の邸宅に仮事務所を設けて復興事業を指揮。授業が再開された矢先の13年1月26日に帰らぬ人となった。

著書には『英米売買法』『米国訴訟法』などがある。

## 創立者の4人 日本の経済・政治に足跡 専修大学の教育に尽力

### 田尻稲次郎—日本初の法学博士に「財政学」の第一人者

財政学の権威として明治から大正にかけて活躍した経済学者の田尻稲次郎(たじりいなじろう)(1850~1923)は、薩摩藩京都上屋敷に藩士の三男として生まれた。

洋学を学び、長崎に遊学した後、上京。慶応義塾、開成学校、海軍兵学寮、大学南校に学び、刑部省から留学を命ぜられ、明治4年(1871)、アメリカの土を踏んだ。エール大学文科で経済学、財政学を学び学位を得て、引き続きエール大学大学院に学んだ。

相馬とは「日本法律会社」をおこした。異国の地で相馬と田尻は固く結ばれ、生涯の親交の土台を作った。質素を旨とし衣服にかまわぬ姿を、友人たちは「きたなり」(田尻の号は北雷)と呼んだ逸話がある。

帰国の翌年、専修学校を創立すると、田尻は駒井と共に経済科で教授。

「貨幣論」「銀行史」「租税論」「国債論」などを担当した。文部省御用掛を命ぜられ、東京大学でも理財学を講義した。明治17年(1884)に大蔵省入りをしてからは財政学の知識を高く買われた。後に帝国大学法科大学教授を兼任。21年(1888)、日本初の法学博士の学位を取得した1人。

大蔵省銀行局長を経て、24年(1891)主税局長となり、同年貴族院議員、25年大蔵次官に進む。大蔵総務長官を経て34年(1901)会計検査院長、39年(1906)帝国学士院会員。40年には子爵となる。

大蔵省時代は、特に日露戦争時に戦費調達、債務処理に功績をあげた。大正7年(1918)、会計検査院長を退くと東京市長に就任。晩年は専修大学の学監を務めた。

11年(1922)には相馬と共に文部大臣表彰を受けている。経済科の教科書に用いた田尻の訳書には英・マクラウドの『銀行史』、同・ゼボンの『貨幣論』、仏・ポリュエの『財政論』などがあり、当代随一の訳書と評された。

専修大学では多くの子弟に慕われ、東京市長在職時に、日曜日にも講義(補講)を持ち、感謝された。平日に授業に出られない働く若者たちのためであり、生徒に教える労を惜しまない姿勢は、いつまでも衰えることはなかった。

73歳で亡くなった時の盟友・相馬の弔辞は印象深い。

「明治13年、同志と謀り、本学の前身たる専修学校を創立し、爾来今日に至るまで44年、真に一日の如く教鞭を執り、嘗て倦色なし。本大学が、質実剛健、真摯力行の校風を馴致するに至りたるもの、主として先生の徳に依らずんばならず」とたたえた。



## 創立者の4人 日本の経済・政治に足跡 専修大学の教育に尽力

### 目賀田種太郎—名演説家・学生に指導 日本に音楽教育導入も

目賀田種太郎(めがたたねたろう)(1853~1926)は、幕臣の家に生まれ、幼少から漢学を学び、英語、数学を修めた。英才の誉れ高く、大学南校に入学。新政府により米国留学生に選ばれ、明治3年(1870)、米国に渡る。17歳の時である。ハーバード法律学校(現・ハーバード大学)で一般法学の大意、国法学を学び、とりわけ国際公法の研究に意欲を燃やした。同校を卒業し学位を得て帰国した。



日本に戻った目賀田は8年(1875)、留学生監督を命ぜられ、開成学校の生徒12人を引き連れて再渡米。自らも法律の研究を深めたのである。

目賀田はニューヨークで、相馬らとともに「日本法律会社」を結成。頻繁に将来の計画を話し合った。



帰国後、目賀田は相馬と行動を共にし、司法省附属代言人となるかたわら、専修学校設立の準備にあたった。

専修学校を創立すると、目賀田が相馬と共に始めた日本語による法律講義は、注目を浴びた。担当は「訴訟演習」「私訴犯法」「弁論科」などで、自ら編纂した『私訴犯法』『羅馬(ローマ)法典』を教科書に用いた。

卒業式では、米国の慣行にならい、卒業生が演説を行ったが、その指導に熱心だったのが名演説家の目賀田だった。声の出し方から抑揚、身ぶりやしぐさまで懇切丁寧に教えたという。

16年(1883)大蔵省に入り、主税局長などを務めた。

日清戦争後の29年(1896)、戦後財政の一策として葉煙草専売法公布の主役を務めることになり煙草専売事業の基礎を築いた。38年(1905)専修学校に煙草専売事務員養成所が併設されるようになったのも目賀田の発想によるものだった。

37年(1904)、「日韓議定書」が締結された韓国へ財政顧問として赴任。男爵、貴族院議員、枢密院顧問官となった。

目賀田は音楽教育の開祖としてもたえられた。再渡米中に井沢修二(東京音楽学校初代校長)と出会い、日本の音楽唱歌を欧米の音楽と同化させようと共に研究を続けた。日本では、学校教育に音楽教育が取り入れられなかった時期で、11年(1878)、井沢と連名で音楽教育の意見書を文部大臣に提出。米国で師事したルーサー・ホワイトティング・メーソン(ボストン音楽学校創立者)に働きかけ、後にメーソンは来日、日本での音楽教育の発展に貢献した。

大正13年(1924)に催された相馬、田尻の追悼会では、病をおして出席。盟友をしのぶ言葉を贈り、列席者を感動させた。2年後に他界。

目賀田夫人・逸子は、勝海舟の三女にあたる。

## 創立者の4人 日本の経済・政治に足跡 専修大学の教育に尽力

### 駒井重格—英・仏経済学書を翻訳 名校長として慕われる

英語・仏語に熟達し数々の翻訳書を持つ駒井重格(こまいしげただ)(1853~1901)は、専修学校、高等商業学校(現・一橋大学)などで次代を担う若者の教育に尽力した。

生まれは江戸八丁堀の桑名藩江戸屋敷。明治元年(1868)、戊辰戦争で、桑名の藩兵隊に属して、藩主・松平定敬に従って各地を転戦、藩内に広く認められるようになった。7年(1874)、定敬の弟・定教の米国留学に随行した。渡航を前に米国教師から2年間、英語を学んだ駒井は、米国ではラトガース大学に入学、文科で経済学を学んだ。

滞米4年の留学期間中に、同じ経済学を学んだ田尻稻次郎や相馬永胤、目賀田種太郎らと知り合い、友情を深めた。

松平が先に帰国した後も駒井は米国に残って、しばらく経済学の研究を続ける一方、田尻や目賀田、相馬らと学校創立について話し合った。12年(1879)、田尻とともに帰国。田尻との友情は終生続き、帰国時、田尻の粗末な服装にみかねた駒井は、自ら新調した背広を田尻に贈ったというほほえましいエピソードがある。

専修学校を開学すると駒井はもっぱら経済科で教え、「外国為換」「予算論」「経済考徴」などを担当した。

駒井は米国生活で、英語のほか仏語も学び、たん能だった。駒井の教科書翻訳に英・ホーセット『自由保護貿易論』、同・グーシェン『外国為換論』、仏・ポリュール『歳計予算論』、英・ケアンズ『経済要論』などがあり、いずれも高く評価された。ポリュール『財政論』について田尻の2本の翻訳書は、駒井・閔、田尻・訳となっている。

開校の翌年の記念すべき第1回卒業式では、卒業生11人に幹事として卒業証書を手渡した。東京大学予備門嘱託として、経済学を講義した記録もある。

明治14年(1881)大蔵省入りしたが、まもなく岡山県中学校および師範学校の教師兼校長に転じた。その後大蔵省に戻り、29年(1896)には国債局長兼大蔵参事官に昇進。32年(1899)、高等商業学校の校長を兼任、教育者としての業績をあげ、名校長として慕われた。その2年後、同校長の要職のまま死去。48歳の若さだった。



## 創立者の4人 日本の経済・政治に足跡 専修大学の教育に尽力

## 専修大学年表・4人が活躍した創立期から大正末まで

明治12年●1879	
8~9月	田尻稲次郎、駒井重格、相馬永胤、目賀田種太郎が米国留学から帰国
明治13年●1880	
8月	日本語による経済・法律専攻の専修学校(夜間2年制)設立のため「私立学校開業上申」を東京府知事に提出
9月	京橋区南鍋町1丁目4番地の仮宿舍で16日開校式。入学生は51人
10月	京橋区木挽町2丁目14番地の本校舎(明治会堂)の改装を終え、仮校舎から移る(現在の銀座3丁目)
明治14年●1881	
7月	第1回卒業式。卒業生経済科2人、法律科9人
明治15年●1882	
11月	神田区中猿楽町4番地に校舎移転(順天求合社を借用)
明治16年●1883	
7月	新学期の入学生から修業年限3年に延長
明治18年●1885	
7月	神田区今川小路2丁目8番地に校舎を新築、移転(現・神田校舎)
明治19年●1886	
12月	私立法律学校特別監督条規により、専修学校など五大法律学校が帝国大学総長の監督下におかれる(明治21年同条規廃止)
明治20年●1887	
1月	校外員制度を設け、3年修了者に校友証を交付
同	『専修学校法律学講義筆記』『専修学校経済学講義筆記』発行(明治24年廃刊)
同	同窓会第1回親睦会を開催。規約を制定・発足(昭和25年11月専修大学校友会と改称)
明治21年●1888	
6月	経済科を理財科と改称
8月	特別認可学校規則による特別認可学校になる(明治26年同規則廃止)
同	校長制が敷かれ、相馬永胤就任
明治22年●1889	
9月	政治科を増設(明治24年廃止)
明治24年●1891	
9月	法律科の生徒募集を休止
10月	『理財科講義』を発行(明治28年完結)
明治25年●1892	
9月	法律科の生徒を再び募集
明治26年●1893	
9月	法律科の生徒募集を停止、理財科のみとなる
12月	判事検事登用試験規則による司法省指定学校となる(明治35年まで)
明治34年●1901	
12月	創立者 駒井重格死去(9日)。48歳
明治37年●1904	
4月	専門学校令により専修学校となる
明治38年●1905	
8月	理財科を経済科に改称⇒10月 新たに商科を増設、初めて昼間の授業を開始
明治39年●1906	
9月	学則を廃止して大学組織とする。大学部(修業年限3年 経済科、法律科、商科)、専門部(修業年限3年 経済科、法律科、商科)、高等専攻部(修業年限1年 専門学校および大学部卒業者)、専門学校令による昼間の高等予科(修業年限1年)

明治40年●1907	
5月	学校経営を社団法人組織とする
9月	校舎・校宅を改築
明治44年●1911	
7月	専門部商科および大学部商科を廃止(昼間授業は高等予科のみとなる)
11月	創立30周年記念講堂および相馬田尻還暦記念文庫が落成
大正元年●1912	
9月	相馬田尻還暦記念文庫を拡張し図書館を開設
大正2年●1913	
7月	校名を私立専修大学と改称
同	高等予科を大学予科(1年半)に、高等専攻部を研究部と改称
同	相馬永胤校長が初代学長に就任
大正6年●1917	
9月	専門部に計理科を増設
大正8年●1919	
9月	校名を私立専修大学から専修大学と改称
大正9年●1920	
9月	木造3階建て校舎竣工
12月	大学経営を社団法人から財団法人に組織変更
大正10年●1921	
4月	大学予科の修業年限を2年とする⇒9月 専修大学新帽章(現在の校章の原型)決まる
大正11年●1922	
5月	大学令により認可(専門学校令による専門部を継続して併設)
8月	相馬永胤が専修大学初代学長に就任
10月	学制頒布50年記念祝典で、学長・相馬永胤と学監・田尻稲次郎が教育功労者として文部大臣表彰を受ける。この日(10月30日)を大学記念日として今日に至る
大正12年●1923	
4月	大学令による専修大学を設置、経済学部および大学予科、専門部開設、法学部は未開講
8月	創立者・学監の田尻稲次郎死去(15日)。73歳
9月	関東大震災により校舎を焼失。立教大学教室を借用
12月	木造平屋建て仮校舎および付属建物等竣工
大正13年●1924	
1月	創立者・学長の相馬永胤死去(26日)。73歳
2月	阪谷芳郎が学長に就任⇒12月 木造2階建て校舎および図書館竣工
大正15年●1926	
1月	校歌・応援歌を制定
9月	創立者・学監の目賀田種太郎死去(10日)。73歳